実践報告
順天堂大学保健看護学部　順天堂保健看護研究 2
P.39－45 (2013)

新設学部におけるFD研修会の意義
～順天堂大学保健看護学部での2年間の実践報告～

Meaning of the FD Workshops in Newly Established Faculty
- The report from the past two years of practice at our school -

佐々木　史　乃[1)]　齊　藤　麻　子[1)]　酒　井　太　一[1)]　西　　典　子[1)]
SASAKI Shino　SAITO Asako　SAKAI Taichi　NISHI Noriko
立　岡　弓　子[2)]　土　屋　清　子[1)]　美ノ谷　新　子[1)]　吉　尾　千世子[1)]　稲　冨　恵　子[1)]
TATEOKA Yumiko　TSUCHIYA Kiyoko　MINOTANI Shinko　YOSHIO Chiyoko　INATOMI Keiko

要　旨

順天堂大学保健看護学部（以下「本学部」という。）の教育目的を達成できる教育者の育成と教育力向上を目指して開学1年目より開催してきたFD研修会の意義と役割を検証した。FD研修会は1年に1回1日間、テーマに沿った課題の提示とその後のグループワーク、全体会からなる。初年度は本学部の教育理念の共有、2年目は本学部学生を理解した教育をテーマに開催した。FD研修会のテーマや内容に対する参加者の関心は高く、情報共有の機会として好評を得た。FD研修会が教育内容や学生に関する情報交換や共有の貴重な場であっただけでなく、教職員相互の交流の機会ともなっていた。今後も本学部の看護教育の方向性を共有し、教職員相互が交流を深めて教育力・職務力を高めあう場としてFD研修会が機能することを望みたい。

索引用語：FD研修会、新設学部、看護教育、教育目標、情報共有
Key words：FD workshop, newly established faculty, nursing education, educational target/aim, information sharing

Ⅰ．はじめに

大学の教育・研究の質を保証する目的で教育内容や教育方法の改革をめざすための手段として、ファカルティ・ディベロップメント（以下FD；Faculty Development）が注目されている。大学におけるFDの実施は、1999年からの「努力義務」から、2007年の大学院および大学設置基準の見直しにより「義務化」された。文部科学省中央教育審議会大学分科会は、FDを「教員が授業内容・方法を改善し、向上させるための組織的な取り組みの総称」と定義している。

また、日本看護系大学協議会FD委員会では、2009年・2010年の活動報告書として「看護系大学の将来を担う教員に対するFDのあり方について - 将来を見据えた組織的なFD企画のために - 」をまとめている[1)]。このように、日本看護系大学協議会は、教員の能力開発のためのFD体制づくりや、各大学との連携・協働の必要性を広く周知した活動を行い始め

1）順天堂大学保健看護学部
2）滋賀医科大学医学部看護学科
1）*Juntendo University School of Health Sciences and Nursing*
2）*Shiga University of Medical Science Medical Department Nursing Subject*
(Mar. 5, 2013　原稿受付)（Mar. 19, 2013　原稿受領)

ているところである。

小野田[2]は、看護系大学がFDにおいて取り組むべき具体的な課題として、①大学の教育理念や課程の目的を教員間で共有すること、②安定した教育組織において自律的に教育課程や教育方法を検討すること、③他分野の教員や実践家と相互理解をしながら共通の目標を目指せる高いコミュニケーション能力を持つことなどを挙げている。

本学部では、教育目的を達成できる教育者の育成と教育力向上を目指して開学1年目より、FD研修会を開催している。FD研修会がその目的を果たす会となったかについて、2年度分のFD研修会の振り返りから示唆を得ることができたのでここに報告する。

II．目　的

開学後2年間のFD研修会の実践を振り返り、本学部が目指す看護教育を担う教職員の研修会となったかについて検証する。

III．方　法

開学1年目（平成22年度）、開学2年目（平成23年度）のFD研修会開催内容の記録、報告書および参加者からのアンケート内容をまとめたので報告する。

IV．結　果

1．開学1年目の研修会の概要

表1に示す通り午前中は、基礎看護学の野村志保子特任教授より、基礎看護教育の長年の経験を基に、「看護学教育で大切にしてきたこと～基礎看護学の教育の考え方、実践～」の講演があった。午後は、講演の内容を受けて、「教育要項の共通理解を図る～どのような学生を育てたいか（卒業後の学生像）～」をテーマに、グループでのフリートーキングを行った。その後、全体での発表・質疑応答と活発な意見交換を行った。

1）講演の内容

講演の主な内容は①基礎看護学の教育を支えている考え方、②看護学概論の教育について、③看護技術の教育の3点であった。

①では、看護の初学者である学生の生活体験から学習内容を引き出す課題や原理原則を考えさせるような課題を提示し、学生の思考を、抽象的なものを具現化したり、一般的なものを特殊な場面に適用したり、また体験を理論化したりと認識を自由自在に発展できるような、認識ののぼりおりを授業の様々な場面で意図的に組み入れ、理論と実践を結びつけた教育を実践していること。

②では、「健康」「人間」「環境」「看護」をキーワードとし、看護の本質や看護の対象となる人々の特性等について自分のことばで自分の考えを他の人に説明することが出来ることを目指していること。

③では、知識や技術を関連させながら考えたり、既習学習を新しく学ぶことに応用できる能力を培うような題材を選び、授業の様々な場面で意図的に組み入れていること。そして、単に知識や技術の習得だけでなく、患者の心地よさ、安楽にも目を向けさせ、看護者の手のぬくもりの大切さを強調し、「知識・技術だけでは駄目！心がなければ！心だけでは駄目！知識・技術がなければ！」という看護学教育で大切にしてきたことの貴重な講演を聴くことができた。

2）グループワークでの共有

グループワークでは卒業後の学生像として、「原理・原則、知識・技術と思いやる心を持って欲しい」、「考える力がある人、様々な人とコミュニケーションがとれる人になって欲しい」、「高校までの回答の出し方でなく、看護の対象が人間であるため答えは出しにくいし、一つであるとは限らない。そのことの理解が困難で悩む学生が多いのではないか」等の討議がなされた。

全体討議では、「様々な体験を通し多くの人と関わる機会を設定し、意見の違い、話す・聴くなどの能力

表1 FD研修会の概要

	開学1年目（平成22年度）	開学2年目（平成23年度）
テーマ	保健看護学部における教育要項の共通理解を図る ～どのような学生を育てたいか～	学生の状況と課題について ～1年間学生に関わって見えてきた学生の特徴や傾向（問題・課題）から教育方法や対応を考える～
目的	本学部においてどのような学生を育てたいか（卒業後の学生像）を教職員間で討議することを通して本学における教育の要項についての共通理解を深め、今後の教育課程に反映できるようにする。	①教育活動と学生生活支援に関する教職員間の意見交換の場とする。 ②学生の状況を共有し、教職員間の親睦を深め、教育活動と学生生活支援に活用する。
時期	平成22年8月31日(火)　10：30～15：30	平成23年8月8日(月)　10：00～16：00
開催場所	本学部11番教室および演習室	本学部11番教室および演習室
参加人数	21名 ・本学部の教職員 ・次年度就任予定者	36名 ・本学部の教職員 ・次年度就任予定者 ・医療看護学部・スポーツ健康科学部教職員
主なスケジュール	【午前】講　演 テーマ：「看護学教育で大切にしてきたこと」 講　師：野村志保子　特任教授 【午後】グループワーク、発表、質疑応答 テーマ：「教育要項の共通理解を図る ～どのような学生を育てたいか （卒業後の学生像）～」	【午前】パネルディスカッション テーマ：「学生の状況と課題」 パネリスト： 山下　巖　先任準教授（一般教養科目） 辻川比呂斗　助　教（専門・基礎科目） 末永真由美　講　師（看護専門科目） 濵口真知子　助　教（学生部委員会） 門脇　玲子　主　任（事務職） 【午後】グループワーク、発表、質疑応答 テーマ：「学生の状況等課題について」

を育むことが重要である。」、「部活動や教養ゼミナール、グループワーク等はその能力を培う機会となる。学生個々の全体像を捉えるには、教職員が情報交換を綿密にすること」など、学生と積極的に関わることの重要性を確認した。また、学生へのアプローチ方法については、科目『救急法の理論と実践』のように、学生自身の努力により達成感を味わうことのできる体験は、自信や満足感に繋がっていること、さらに、『基礎看護実習』での体験のように、「教員がモデルを示すことで、より客観的に看護師の視点で、患者に関心を寄せるようになるのではないか。」と討議された。保健看護学部が目指す学生を育てるためには、まず教職員が積極的に学生と関わり、自らモデルとなり手本を示すことが重要である、という意見が多勢を占めた（**表1**）。

2．開学2年目の研修会の概要

開学から2年目を迎えた平成23年度のFD研修会は、約1年間にわたる授業や学生生活支援を通じた関わりの中から見出された学生の状況と課題を教職

員間で共有し、今後の教育や支援に活用することを目的に企画された。

開学時から在職し、1・2年生の講義を担当することで学生との関わりの多い教員、学生の学内外の活動に関わる学生部委員、事務スタッフの計5名からの話題提供によるパネルディスカッションと、グループワーク・発表の2部構成による研修会となった。

1）パネルディスカッション

PCを利用したe-learningによる英語教育を実践している山下先任准教授からは、「デジタル世代に生きる若者の志向・行動様式を踏まえた英語授業TIPS」として、コミュニケーション・余暇活動のみならず学習にも「ケータイ」を使用する現代学生のデジタル・リテラシーと、その情報処理能力に合わせた視覚的な教材の工夫について述べられた。

運動系科目と形態機能学の講義を担当する辻川助教からは、「一般教科とスポーツ系科目から見た学生生活について」として、運動系科目と形態機能学の試験結果における成績の緩やかな相関と、相互の学習効果向上への期待が報告された。

基礎看護学領域を担当する末永講師からは、「基礎看護学の授業と実習における学生の状況」として、実習室の利用状況に見る学生の自己学習の取り組みへの意欲の変化と、グループワーク・実技演習や実習等の体験型の学習による学びの深まりや看護者としての自覚の成長等が述べられた。

学生部委員の濵口助教からは、「学生実態調査結果に見る学生像とその後の状況」として、本学部学生の学内外での生活（学習時間、睡眠時間、アルバイト、悩み等）についての報告がなされた。事務職の門脇主任からは、「事務職員としての学生との関わり方」として、学生のコミュニケーション力や人間関係能力の向上を目指して、事務室に訪れる学生の顔と名前を覚えるよう声をかけたり、学生と共に考えられるような働きかけを意識的に行ったりしていることが述べられた。

各パネリストからの話題提供を踏まえ、さらなる学生の実態や特徴、学生に合わせた授業の工夫の実践例等の情報提供や質疑がフロアからあり、教職員全体でのディスカッションとなった。

2）グループワークでの共有

午後は、パネルディスカッションの内容を基に、5グループに分かれ、「学生の状況等の課題について」の90分間のグループワークが行われた。グループワークでは、学生の私語・居眠り・途中退席等の集中力の欠如による授業態度の状況や、ソーシャルネットワーク等への投稿に見られる倫理的問題の意識の希薄化など現代の学生像と課題が出された。また、それらの学生の実態を把握したうえでの集中力を高める授業の工夫や、学生への精神的サポートについても話し合われた。さらに順天堂人としての品格を持った学生の育成や大学教育の在り方についても討議された。

その後のグループでの討議内容について発表が行われた。全体討議では、学生の未熟でできない部分のみを批判するのみでなく、学生の能力を活かし興味を引き出すような教育を行っていく大学教職員としての役割について意見交換が行われた。

3．研修会実施後のアンケート結果

1）回答者数と回答率

開学1年目　20名（95.2%）、開学2年目　33名（91.7%）

2）実施内容についての評価

（1）テーマについて「関心が持てた」との回答は、開学1年目は95%、開学2年目は100%であった。

（2）研修の構成と内容について、「関心が持てた」との回答は、開学1年目で、講演95%、グループワーク100%、発表95%であった。開学

表2 今後のFD研修会に希望するテーマ

開学1年目（平成22年度）	開学2年目（平成23年度）
＜授業に関すること＞	＜授業方略に関すること＞
分野別の学習内容の理解、教育方法	学生を惹きつける授業方法
各領域での授業方法の紹介	課題の出し方、学生の集中力を持続させる授業、良くわかる授業とは
実習指導や教授方法（PBL，チュートリアル等）	＜教材に関すること＞
＜教材に関すること＞	パワーポイントの講習会
講義の組み立て方	教材開発
効果的な講義資料の作り方	＜学生への対応＞
マルチメディアの活用	面接の方法
＜学生への対応＞	＜その他＞
部活動の活性化	教育の質保証について
学生間の連携強化	効果的な授業評価
＜授業の振り返り＞	教育課程とシラバスについて
授業点検、フィードバック	FD活動に関する事（専門家による講演）
＜その他＞	
国際交流、国試対策	

2年目は、パネルディスカッション97%、グループワーク97%、発表76%であった。自由回答からは、「テーマは大きすぎて抽象的にならないようにして深いディスカッションを行うと良い」、「パネルディスカッションにより多角的な意見を聞くことが出来良かった」、「パネルディスカッション、意見交換という組み合わせは良いと思う」、「討議の時間が十分でなかった」等の意見があげられた。

（3）今後のFD研修会に希望するテーマとしては、**表2**に示す項目があげられた。

3）FD研修会全体に対する自由記載では、「今回と同じテーマを、各領域の教員がそろった時点でもう一度行う」、「今回グループ発表で出たテーマから共有化すると良いと思われるものを深めていく」といった『テーマの継続への希望』、「他学部の教員とディスカッションできたことが良かった」「就任前に参加できたことで、身近に感じられてよかった」「各学部が共通して認識している問題・課題について情報交換・共有ができ有意義であった」等の『交流による情報共有の効果』、「学生も参加できると良い」「振り返りのため年2回開催」「宿泊も良い」等の『開催方法への提言』等があげられた。

V．考　察

1．FD研修会の意義

開学1年目からFD研修会を開催してきたが、参加者のFD研修会への評価はアンケート結果で見る通り好評であったと考えられる。特に開学してからの2年間は、教職員同士が十分な人間関係を育む暇もないままに、日々の学生への教育・指導に当たっていた。着任数カ月後に開催したFD研修会は、教職員相互の交流、学生、教育内容の情報交換や共有の貴重な場となっていたのではないだろうか。

看護系大学がFDにおける取り組むべき具体的な課題として、他分野の教員や実践家と相互理解しながら共通の目標を目指す高いコミュニケーション能力を持つことを挙げている[2)]。FD研修会の構成は講演、

パネルディスカッションだけでなく、グループワークと全体会を組み込んでおり、この構成が共通の目標を目指す高いコミュニケーション能力を高める機会となっていると考えられる。

2．教育理念の共有

本学部では、学是である「仁」の精神に基づき、チーム医療の一翼を担う優れた看護実践力をもつ心温かな看護職者及び地域の人々の保健衛生・健康保全に貢献する国際性豊かな看護職者を養成することを教育目的として掲げている[3]。

開学1年目の本学部では、教員個人の能力の向上と相まって、教員が一丸となってより質の高い看護職の育成に取り組む組織力の強化が必要とされた。そこで第1回FD研修会では本学部の教育目標を達成できる教育者の育成を目指し、教育力の向上の一環としてどのような学生を育てたいかを、教育要項に基づいて共通理解を図ることを目的に開催した。具体的には、基礎看護教育のスペシャリストの講演をきっかけにして、グループワークで本学部教員に求められる能力、教育的関わりについてのディスカッションを行った。全教職員の着任数カ月に行ったFD研修会は学部の教育目標の共通理解を促す機会となった。また、ディスカッションを通じて看護職育成を目指す仲間同士との出会いを実感できたと推察する。

この結果を受けて、第2回FD研修会からは研修会の目的に教職員間の親睦を深める機会とすることを明記した意義は大きいと考える。

3．本学部の学生像

大学は、初等中等教育を礎とした高等教育の位置づけにあり、義務教育の範疇ではなく、本来勉学を希望する者が自らの学問を選び、自立して学習する場である。

学校基本調査[4]によると、高校進学率は通信制を含めると98％を超えており、平成23年度の大学等進学率は普通科で62.8％を占めている。このような社会情勢の中では、高学歴希望者が必ずしも自ら勉学を希望する自立した学習者であるとは限らない。例えば、それは授業中の私語や居眠り、途中退席など授業への集中力の無さや、無断欠席、遅刻、早退などの勉学への不熱心さの行動として現れており、本学部学生についても同様の傾向が見られている。

大学生の週間平均生活時間をみると最も多く費やすのは大学の授業で約20時間弱であり、娯楽・交友が17時間弱となっている[5]。看護学生に特化した週間平均生活時間は抽出されていないので推測の範囲ではあるが、一週間の通学日を5日とすると、大学の授業時間は20時間以上であると考えられる。看護学生の大学生活はほぼ毎日登校し、丸一日授業を受け、自己学習が求められるなど学習量が多い。部活・サークル、アルバイトなどに振り分ける自由時間は少なく、夢想した大学生生活と現実との相違に葛藤する学生もいるであろう。看護学生の入学動機は「実利・自立志向」、「奉仕志向」が特徴的で多い[6]と言われており、学生の葛藤を理解しつつ、一人一人の自立志向を到達させる責任が看護大学教員には求められていると考える。

FD研修会のグループワークでは、学生の物事の判断が自己中心的であることやバーチャルコミュニケーションの中で対人関係能力の低下傾向への危惧が挙がっていた。柳川らの過去3年時点での看護学生生活調査の比較では、学内の人間関係は先輩、後輩関係の希薄化の一方で教員との関係が親密になっていることを指摘していた[7][8]。看護はコミュニケーションなしでは展開できない技術であり、看護は対人関係そのものであると考えられる。授業内外に関係なく日頃から教師がモデルとなって、意図的にコミュニケーション技術を用い、対人関係を積極的に持ち・結ぶ姿を見せることも効果があるのではない

かと考える。

4．教育課題

講義形式の一方向性の教育だけでなく、学生の興味・関心に応じて授業の工夫が求められている。学生が初等中等教育で見聞きし慣れているメディアの活用で授業を厭きさせないことや、双方向性の授業によって学生の知識の定着や理解度を確認しつつ学習進度を計るなど、講義の提供・表現方法の工夫が望まれている。

幸いにも本学にはマルチメディア教室があり、高度な処理能力や情報技術を提供できる設備が整っており、授業のツールとして使うことが可能である。しかし全教員がそれらの機器類を自由自在に使いこなせていないのが現状である。学生に魅力的な授業をするために、ITを積極的に活用することは早晩必要になると思われる。現在、新任教職員のオリエンテーションではITの説明が組まれているが新任研修だけでなく、定期的に情報技術の上乗せ的研修をするなど、学部全体でIT能力の向上を目指す必要があるだろう。

学生の主体的・能動的学びを引き出す教授法の重視が唱えられて久しい[9]が、ここでも先に述べたITを活用した学習への期待が高まっている。教員がITをツールとして使いこなすことや、学生の主体的・能動的学びの学生への動機付けは教員の教育力に回帰すると言えるだろう。学生を自ら勉強する気にさせる仕組みや、新たな発見をする喜びを学生に与えるきっかけつくりをする。これら一連の、教職員全体の教育力を高める活動の一助としてFD研修会を有効活用することが望ましいと考える。

Ⅵ. おわりに

本学部は開学3年目を終え、来年度は完成年度を迎える。開学1年目よりFD研修会を開催して、全教職員が参加したことの意義は少なくない。新設ゆえに様々な大学や研究機関から集まった教職員の組織であった。

FD研修会は、本学部の建学の精神や看護教育の根幹を共有し、教職員全員で学部の歴史を形成するスタートラインに立つ機会となったと言えるだろう。そして今後も本学部の看護教育の方向性を共有し役割分担をしつつ教職員相互が高めあっていける場としてFD研修会が機能することを望みたい。

引用文献

1）日本看護系大学協議会FD委員会：平成21年度・平成22年度活動報告書、2011.

2）小野田恭子：看護系大学におけるFD推進の課題、日本看護科学学会誌31(2), 99-100、2011.

3）順天堂大学保健看護学部：教育要項、2010.

4）文部科学省:平成24年度学校基本調査報告書（初等中等教育機関　専修学校・各種学校編）、2012.

5）独立行政法人日本学生支援機構：平成22年度学生生活調査、32、2012.

6）服部容子、吾妻知美：看護学新入生の入学動機と生活習慣に関する調査―「生活援助技術」の授業内容の検討―、甲南女子大学研究紀要　創刊号、61-71、2008.

7）柳川育子、矢吹明子：現代の看護学生の生活および気質の特徴（第1報）―2009年と2000年および1987年との比較―、京都市立看護短期大学紀要　35、197-211、2010.

8）柳川育子、矢吹明子：現代の看護学生の生活および気質の特徴　第2報（次元別解析）―1987年、2000年及び2009年の比較―、京都市立看護短期大学紀要　36、61-68、2011.

9）文部科学省中央教育審議会：学士課程教育の構築に向けて（答申), 2008.